

海 輪 の 火

松方幸次郎とその時代

波濤編

(31)

題字は
故松本鳳治氏

とりあらずロンドンのホテルに旅装を解いた松方幸次郎は、シティへ足を向けた。シティは、世界の金融、保は厚いビルが立ち並び、その間の銀行や企業が、このほば装った馬車が駆け、書類を小一軒(約一・六キロ)四方の区(約一・六キロ)に抱えたビジネス城にオフィスを出し、商品や情報を取引した。第一次大戦を境にニューヨーク・ウォール街の存在が急激にクローズアップされるが、幸次郎が訪れたこの時期はまだ、シティが世界経済を生み、政治情勢をも動かすパワーを持っていた。

シティで高畑と対面

ロンドンでは、世界で最も早く地下鉄の走った都市でもあり、日本がまだ幕末の動乱期にあったように開通したロンドンの地下鉄は、この年一九

二まで来るテムズ川はほど近い。しばらく歩くと、左手に「マーケット・ヒル・ディング」と明記された共同の事務所ビルが目に入った。金庫で三十四社が入るこのビルの中に、指す会社の名前があった。



高畑 誠一



当時のシティの中心部。この街が世界経済を左右した

高畑誠一である。

高畑は、神戸高商(現神戸大)を卒業しており、幸次郎の名前は以前から耳にはしていた。しかし、面と向かって話をするのは初めてだった。幸次郎はソファに深々と座ると、金子がこの年、幸次郎らの意見を聞いて捕鯨造船所(現若川造船所)を買収し造船業に進出したことを話題に上らせた。

「金子さんは強気じゃね。おれも同様で強気で船をつくらせる。そこで一度ヨーロッパの様子を見たいと思って来たんじゃが、どうじゃ」(敬称略)

「SUNRISE & CO」 盟友金子直吉の率いる鈴木商店ロンドン支店である。この時鈴木商店は、金子の積極経営の下、海外二十三都市に支店を構えていたが、ロンドンにはニューヨーク支店と並んで海外出の双へきを成して、大正十二年には、駐在員も二十九人に達する大所帯。半島でロンドン入りした幸次郎は、現在の商社と比べて、鮮やかな立ちの青年が対応に出た。後に鈴木商店の取締役になる。日商(現日商銀行)に就き、日商(現日商銀行)の初代社長を務めることになった。

神戸新聞 平成元年(一九八九年)十月三十一日 より転載